資料２

平成30年度　白石町立須古小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
郷土を愛し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成 ・「主体性」＝自分（たち）で考え行動する ・「つながる」＝保護者・地域と共に創る学校づく	①学ぶ喜びと達成感が味わえる学校 ②心が通い合い、笑顔いっぱいの学校 ③地域から信頼され、地域と共に発展する学校

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	基礎的・基本的学力の定着と活用力の向上	・全国平均より高い水準での学力の維持を目指す。 ・「自分の考えを文や言葉で表現することができる」という児童を85%以上にする。	・各種テストの結果を分析，考察し，全校で共通した取組を実践する。組織的に学力向上を図る。 ・SAを活用した個別指導・支援を実施する。 ・話し方や聴き方を具体的に示しながら，表現の場や機会を意図的に設ける。	A	・全国学調では，国及び県平均を大きく上回った。また県学調[4・12調査]では，ほとんどの教科で県平均を上回った。 ・学力向上を意識した指導については，すべての担任及び級外職員が共通理解のもと，分かりやすい授業づくりと支援を心がけている。これにより，授業がよく分かる児童が98%，自分の考えを発表したり，書いたりできる児童が96%と高い達成率を示している。	・学力向上対策の取組みである『須古小スリーアップ作戦』を充実させ，①授業改善②学習・生活習慣づくり③家庭学習の向上を全校的に行っていく。 ・朝の時間を活用したヤッタータイム（国・算）の時間確保と級外やＳＡの支援を充実させていく。 ・校内研究や公開授業の場を生かし，研究・実践を積みながら，教員個々の指導力向上を目指していく。
教育活動	○特別支援教育の充実	教師の専門性と意識の向上	・個別の支援を必要とする児童への指導の在り方について全職員の共通理解を図り，指導法を工夫する。	・特別支援学校などの諸機関と連携を深め，巡回相談等での指導助言を個別の支援計画に生かしていく。 ・共通理解の会を定期的に開催し，組織的に対応する。 ・SAを活用した個別指導・支援を実施する。	A	・特別支援学校・専門機関などの諸機関と連携し，年間5回の支援会議を実施し，指導助言を個別の支援に生かすことができた。 ・共通理解の会を開き，全職員が共通理解のもと，組織的に対応した。 ・支援を要する児童について，支援計画の作成や見直しをすることができた。 ・SAを活用した個別指導・支援を実施した。	・今後も，通常学級の児童を含め，個別支援を要する児童について，特別支援学校などの諸機関と連携し，巡回相談等で指導助言を受け，個別支援に生かしていく。 ・来年度も共通理解の会を開き，共通理解のもと，組織的に対応する。 ・個別支援を要する児童の支援計画を作成し，必要に応じて加除修正する。 ・SAを活用した個別指導・支援を続ける
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組みを推進するとともに、教職員の時間外勤務について1ヶ月当たり前年度比10%削減する。	・各教職員の勤務時間を確実に把握するとともに、特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。 ・校務の見直しについては、特に校内研究、学校行事において内容・進め方の改善を図る。	A	・教職員の時間外勤務については、前年度の1ヶ月当たりの平均が39時間23分に対して、今年度は35時間8分と10%削減することができた。 ・各部長が中心となって、二部会での協議内容を早めに行い、提案や準備等の分担を手分けすることで、一人当たりにかかる分掌事務の時間が軽減された。	・校内研究については、来年度から水曜日の6時間授業が始まり、研修の日数が減るので、計画的に日程を組み、長期休業中に集中して、研修会や授業や教材の準備を行うようにする。 ・タイムマネジメントの手法を取り入れ、学校目標の達成のため、効率よく業務を進め、ワークライフバランスを適性に保つようにする。

②

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	感謝の心、思いやりの心の育成	・「自分のよさや友だちのよさが分かる」児童の割合を90%以上にする。 ・授業参観で道徳の授業を年1回以上行う。（ふれあい道徳）	・人権教育の視点に立った授業や実践を行う。 ・人権集会，平和集会，なかよし活動，「けやきの木」活動を継続して実施する。 ・けやきッズタイム，なかよし活動を充実させ，けやきカードも効果的に活用して児童の自己肯定感を高める。 ・異学年で互いのよさや働きを認められるような場や機会を設定する。 ・全校でなかよし宣言を考えさせ、思いやりの気持ちを育む。	A	・「自分や友だちのよさを見つけて，友だちと仲良くしている」と答えた児童が95%で，互いのよさを認め合う姿が多く見られた。 ・全学年が，年1回「ふれあい道徳」の授業参観を実施した。 ・けやきの木，けやきッズタイム，なかよし活動（掃除や遊び）に継続して取り組み，異学年の交流ができた。 ・人権集会や平和集会を通して，児童に人権意識を持たせることができた。	・特別活動や道徳の授業では，教科や体験活動，日常活動との関連を図って授業を行う。 ・人権集会や平和集会，なかよし活動，「けやきの木」活動，そしてけやきッズタイムも全校的に偏りなく引き続き行っていく。 ・自己肯定感がまだ高まっていない児童もいるので，今後も自尊心を高めるための活動や友だちとの関わり合いを増やすなどして，豊かな体験活動の中で，心の教育に努めていく必要がある。
教育活動	●いじめの問題への対応	生徒指導、教育相談の充実	・「あいさつだ・い・じができている」という児童を90%以上にする。 ・「学校が楽しいと思う」という児童100%を目指し，QUテストの学校生活満足群の児童を増やす。 ・いじめの覚知，認知に対する共通理解を図り，早期発見，対応の迅速化を行う。	・生活のめあてや事案について共通理解を図り，組織的に対応する。 ・定期的なアンケートや心のチェックシートを行い児童の実態把握に努める。 QUテスト，バールソンの抑うつ傾向テスト等を活用し，課題の早期発見や児童理解に努める。 ・スクールカウンセラーやひだまりルームについて児童や保護者に周知し，積極的な活用を図る。 ・いじめ対応マニュアルを教職員が熟知し，体制作りをする。 ・全校でなかよし宣言を考えさせ、思いやりの気持ちを育む。	A	・生活のめあてについては、月ごとに各担当より児童に分かりやすく示すことができた。また、児童の実態や事案に合わせて、学級単位や全校児童に向けて、機会をとらえて指導することができた。 ・あいさつについては、あいさつ運動の取組等もあり、児童の意識も高かった。地区内でのあいさつについては、個人差があり、課題が残った。 ・QUテスト，バールソンの抑うつ傾向テスト、心のお天気、いじめに関するアンケート等で気にかかった児童については、各担任が個別に聞き取りをし、早期発見に努めた。	・問題行動やいじめについては、「いつでも、どこでも起こりうる」という意識を持ち、アンケートのみに頼ることなく、日常的にアンテナの精度を高めておくことが大切である。同時に、少しでも気にかかることは、職員間で共有できるようにしたい。いじめ・問題行動に関しては、今後も引き続き、早期発見と迅速な対応に努めていく。 ・あいさつについては、「だれにでも・いつでも・じぶんから」の意識付けをさらに徹底していきたい。 ・SC、SSWの積極的な活用を推進する。保護者への呼びかけも積極的に行う。 ・ひだまりルームを効果的に活用し，支援者との情報交換を密にする。
教育活動	●健康・体づくり	健康な生活習慣の形成	・「早寝・早起き・朝ごはん」ができている児童90%以上にする。 ・食の大切さを理解させ，バランスのよい食事ができるようにする。	・食への意識を高めるために，食育授業や健康チェック調査・保健指導を実施する。 ・手洗い・うがいの奨励や清潔検査の実施，外遊びの奨励により，健康作りへの意識を向上させる。	A	・食への意識を高めるために，毎日給食の献立について栄養面を考えた放送を行った。給食週間では講話や交流給食を実施した。 ・委員会活動や掲示物、ほけんだより等を通して、感染症・ケガの予防等について意識が定着し、児童の健康作りへの向上に努めることができた。	・食への意識向上のために，食育授業や食育講話を行う。 ・心と体の健康チッェク表を毎学期実施し、本的な生活習慣が身につき、自ら進んで健康作りへの意識を高めていく。
教育活動		運動習慣の定着化	・進んで運動を楽しむ児童85%以上を目指す。	・ジョギング・ウォーキング週間の実施，昼休みの外遊びの奨励により，健康作りへの意識を向上させる。 ・委員会活動と連動して，全校で運動に取り組む機会を設ける。	A	・90%以上の児童が運動を楽しんでいる。 ・運動委員会を中心に，クラスでのドッチボールチャレンジや長縄チャレンジ、さらに縦割りでの長縄チャレンジなど積極的に取り組むことができた。 ・ジョギングワーキング週間も元気に運動場で走ることを楽しんでいた。	・スポーツチャレンジなど、期間を設けることで、学級での運動意欲の意識付けにつながり，運動能力の向上につながると思われる。 ・新しいボールの追加やコートなどの整備なども順次進めていく必要がある。

③

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○愛郷心の育成	地域を生かした体験活動の充実	・地域と連携・交流を生かした教育活動の推進を図る。 ・須古のよいところがわかり，伝えたいと思う児童の割合を85%以上にする。	・全学年で地域を生かした学校行事，学級活動での体験活動に取り組ませ，活動を通して地域の「人・もの・こと」に関わらせる。	A	・「地域を生かした学習活動を楽しい」と答えた児童が98%で，各学年の発達段階に応じた様々な活動を通して，地域の方々との交流，ボランティア活動などを行い，そのよさや楽しさを実感させることができた。 ・学校行事と地域に関わる学習活動の全体計画表を作成し，関係団体との共通理解を図った。	・地域との連携がより深まるような校内の体制を整え，学校行事や体験活動をより充実させる。 ・今後も年間の学習や活動の計画を俯瞰して，よりよい地域連携ができるようにしていく。
学校運営	○開かれた学校づくり	コミュニティ・スクール導入による家庭・地域との連携強化	・コミュニティスクールの認知度を90%以上にし，学校の教育活動への協力者を増やす。	・学校便り，学級便りを定期的に発行し，積極的に情報の発信を行う。 ・ブログも随時更新する。	A	・「学校は、ホームページや各種『便り』などで学校や子どもの様子をよく伝えている。」という、保護者が97%であった。特に、アンケートの記述では、「フェイスブックや学校便りで、学校の様子がよく分かり、とてもありがたい。」という意見も多く見られた。	・児童の日々の教育活動をブログ等で逐次発信をしていく。 ・コミュニティスクールをより活性化させるために、定期的に開催される学校運営協議会に職員も参加して各団体と連携が図れるようにする。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

＜本年度のまとめ＞
・学校教育目標の実現に向けて、職員が一丸となってそれぞれの分掌事務が二部会を中心に効率よく機能し「チーム須古」として取り組むことができ、昨年度よりさらに3項目で評価値が上がった。
・コミュニティスクールの学校運営協議会と連携を図り体制を確立し、各種団体・地域・保護者を巻き込んだ活動を計画・実施することで、児童にとって須古の良さを知る体験活動を効果的に行うことができた。
＜次年度の取組＞
・平成２８年度までに取り組んできた「人権教育」の取組みを生かし、次年度からの新たな研究に向けて全職員で取り組むことにより、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につなげていく。
・心の教育では、全組織をあげ連携を強め、自己肯定感を高める取組みをさらに仕組む。児童が活躍し、称賛され、自信をもてる場面が増えることで、児童が自信をもち相手に対して思いやりのある心を育みたい。。
・地域から信頼され、地域と共に発展する学校づくりのために、コミュニティスクールを活性化させ、地域との連携をより深め、子どもたちにとって、より楽しい学校にしていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目